

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23720380

研究課題名（和文）アンデス文明形成期の神殿の成立～衰退の背景を村落機能・地域間ルートに着目して解く

研究課題名（英文）Rise and fall of civic-ceremonial centers of the Andean Formative: Perspectives from village functions and interregional routes

研究代表者

鶴見 英成 (TSURUMI EISEI)

東京大学・総合研究博物館・助教

研究者番号：00529068

研究成果の概要（和文）：

アンデス文明形成期に神殿が成立・維持・放棄された背景を、生活の場としての村落機能と長距離交易網との関係から考察する。まずヘケテペケ川中流域の2遺跡で発掘を実施し、モスキート遺跡に流域最古の神殿群があること、レチューサス遺跡が中流域一帯で最後の神殿であることを確認した。次に、河谷中流域における神殿の登場の早さと継続の長さを地域間交流との関係から説明するため、隣接する他の河谷群にかけて踏査し、仮想ルート上で神殿を含む5つの形成期遺跡を発見して仮説の蓋然性を高めた。

研究成果の概要（英文）：

The main objective of this study is to consider the rise and fall of civic-ceremonial centers during the Formative Period in the Andes focusing on their functions as residential villages and their relationships in interregional networks. Firstly, I excavated two archaeological sites in the middle Jequetepeque Valley. At the site of Mosquito the oldest civic-ceremonial centers of the valley was discovered. On the other hand, the latest center in this region was recognized at the site of Lechuzas. Then, an archaeological survey was carried out in the area between Jequetepeque and the neighboring valleys for the purpose of considering the early emergence and long duration of centers in the middle section of the valley in relation to the interregional interactions. Five Formative sites including civic-ceremonial centers were recognized on the hypothetical route of interactions, which supports my perspectives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：アンデス考古学、文化人類学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：ペルー、アンデス、文明、神殿、形成期、定住、地域間交流、考古学

1. 研究開始当初の背景

(1) アンデス文明形成期の神殿研究

南米大陸ペルー共和国の太平洋岸には、東から西へと、アンデス山脈から多くの河谷が下ってくるが、その流域に点々と現れた最古の定住村落群は、祭祀の場となる大規模公共

建築、すなわち神殿を中核としていた。後の諸王国の時代とは違い、戦術的立地や都市的構造が希薄で社会の階層化が未発達な、これら初期の神殿＝定住村落の時代をアンデス文明の「形成期」と呼ぶ（紀元前 3000～50年）。形成期の社会の展開は長期・広域にわたるため、個々の川・盆地など地域レベルで

の精緻な編年研究と、複数地域の成果を束ねた汎地域的・包括的な考察とを両輪として論じられてきた。遺物の質・量に恵まれ、大規模ゆえに層位も捉えやすい神殿建築は常に議論の中心である。また「神殿を更新(拡張)する儀礼行為が反復され、人口・社会組織・経済などの大規模・複雑化との間にポジティブ・フィードバックが起こった」とされるため、神殿遺跡の調査には文明史研究における積極的な意義がある。

アンデス文明形成期の神殿研究の抱える問題として、そもそも「神殿がどのように成立したのか」という点について、実証的研究が不十分だということが挙げられる。神殿の成立の背景は、その後維持・放棄された背景とも関係する根源的な問題であるため、正確な理解を要する重要な研究課題と言えよう。代表者は本研究を立案するにあたり、神殿の象徴性をいったん脇に置き、人間の生活の場たる村落機能に着目することで、経済・技術などの側面からそれを考古学的に検証することにした。

(2) 代表者の 2010 年までの研究成果

①ヘケテペケ川中流域の神殿群

そのような研究構想に至るまで、代表者もまた神殿遺跡の調査を中心として研究を重ねてきたという経緯がある。

河谷の上流域(山間部)と下流域(海岸平野)は明瞭に環境が異なり、両地域間の編年の対比や交流の様相が活発に論じられてきたが、中間の中流域は重視されず研究が遅滞し、上・下流域双方に影響される不安定で受動的な社会像が漠然と想定されていた。しかし 2003、04、05 年に代表者がペルー北部ヘケテペケ川中流域にて、「アマカス複合」と名付けた神殿の集合体を中心に計 8 地点で発掘したところ、流域内でもとくに古くから大規模な神殿が長期にわたって(形成期前期:紀元前約 1500~1200 年、形成期中期:紀元前約 1200~800 年)継続的に建てられていたこと、また工芸品や墓制などに上流・下流域とは異なる独自の要素を多く持つことが判明した。

さらに 2005 年の調査では、アマカス複合が機能を停止したあと(形成期後期:紀元前約 800~550 年) 5 km ほど離れたレチューサス遺跡に新たに大規模建築が築造されたことを突き止めた。また 09 年にはモスキート遺跡の発掘調査にて、アマカス複合が成立する以前(形成期早期:紀元前約 3000~1500 年)から、その対岸に基壇建築が建てられていたという可能性を見いだした。もしこれらが神殿建築であるならば、この地域はヘケテペケ川流域の前期を通じてとくに神殿の登場が早く、またとくに長期的に建設活動が継続したということになる。

②中流域と地域間ルート:

このようなヘケテペケ川中流域の神殿の特徴を、どのように説明できるであろうか。代表者は中央アンデス地域の環境を巨視的に考察し、河谷中流域という地理的条件そのものの検討を深めていき、とくに地域間交流というテーマを重視するようになった。アンデス地域の広範囲にわたる活発な物資輸送が形成期から始まっていたことは確実であるが、石材などの実用品や奢侈品の交換のみならず、海産物などの食糧資源も輸送対象となっていた。すなわち交易は、村落における人間の生業経済と密接な活動だったのである。そもそもルート結節点から定住化が始まるというモデルは、キャラバンの民族考古学が盛んな南方のポリビアやチリなどでは一定の支持を集めており、また岩絵がその野営地であることなども民族誌から明らかである。

代表者はヘケテペケ谷と他の谷の先行研究とをつき合わせるにより、各河谷の中流域を連続的に南北方向に結ぶ地域間ルートの存在を仮定するに至ったのである。道が遺構として残らない難しさもあり形成期のルート研究は不活発であったが、代表者は神殿のみならず、山間部に散在する岩絵(宗教的図像などを岩に彫ったもの)の分布を併せ見ることによって展望を開いた。2008 年にはヘケテペケ川中流域から南北の隣接河谷へと仮想される地域間ルート上を踏査し、途上で形成期の岩絵を複数発見した。09 年にはアマカス複合の対岸、モスキート平原にて岩絵に接続する特異な形成期建築を発掘し、ルートと密接な立地条件(川の渡場)にあることを示した。10 年には仮想ルートをたどる広域踏査の規模を拡張し、多数の神殿遺跡を発見するなど堅実に検証を進めてきた。

2. 研究の目的

以上の問題意識と調査経緯を踏まえて本研究は計画された。目的は以下の通りである。

(1) ヘケテペケ川中流域のデータ収集

ヘケテペケ川中流域における調査成果を発展継続させ、この地における神殿の成立・維持・放棄の過程を解明する。編年の精緻化こそが研究全体の基礎データとして重要であるためである。

さらに食糧残滓など生業に関する資料や、自然災害や眺望といった景観情報から、村落としての神殿の立地条件を検討する。

(2) 広域踏査によるデータ収集

ヘケテペケ川中流域と接続する、形成期の地域間ルートの実相を解明する。先述の通り、神殿の立地は交易と密接であると考えられ

るためである。

3. 研究の方法

(1) 2011年、発掘調査

初年度は、以下2つの遺跡で発掘を行うことにした。層位発掘により建築が更新された過程を解明するとともに、放射性炭素年代測定法のための炭化物サンプルを採取し、また土壌を水洗して微細な有機遺物を採取することにつとめた。

①モスキート遺跡：流域最初の神殿

モスキート平原にて2009年に発掘を実施した際、2つのマウンドで短期間の試掘を行ったところ、両者とも小規模な基壇建築であると判明したが、その内部の裏込め層からまったく土器が出土しなかった。これまでヘケテペケ川はその全流域を通じて土器を伴う時代、すなわち形成期前期以降の神殿遺跡しか分布しないとされてきたが、土器導入以前の形成期早期、流域最古の神殿がこの地に存在するという可能性が浮上したのである。ただしいずれも小規模であり、また盗掘による破壊を受けていたため、神殿建築であるという確信を得るには至らなかった。ただし、それらに似通った外観の、しかもより大規模なマウンド群は、モスキート平原全域にわたって分布する。それらの総体をモスキート遺跡と名付け、すべてを詳細に観察した上で発掘に好適な地点を選定し、建築の形態や更新の過程を解明し、その年代を検証することとした。

選定したマウンド「Z1基壇」は南北幅約50m、東西幅約30mと規模が大きく、また周囲に4基の小マウンドを伴うため、それら全体が一単位の神殿建築を成すものと想定された。Z1基壇の上でもとくに複数の壁の重なり合いが露出しており、建築の更新過程が確認できそうな地点に発掘区を設定した。

この発掘により、神殿の成立背景を考察する上で必須となる、最初期の神殿建築およびその村落機能に関するデータが提供されると見込まれた。

②レチューサス遺跡：中流域最後の神殿

2005年に短期間試掘したレチューサス遺跡に関しては、アマカス複合遺跡の閉鎖に引き続いて紀元前800年ころに創始されたとの見通しが得られていた。しかし同じ形成期後期の神殿建築の特徴、たとえば方形の半地下式広場などが確認できず、またいつまで機能した建築であったのかが不明であった。全体として地形の起伏に乏しい遺跡であるが、本研究においてはまず地形の観察からはじめ、基壇や広場の埋もれている地点を想定して大規模に発掘し、建築プランを明らかにすることを目指した。

この発掘により、一帯において長期間存続してきた神殿建設の伝統がどのように終焉したのかについて解明されることが期待された。

(2) 2012年、広域踏査

2010年までに踏査によって地域間ルートの実像解明に取り組んできたが、遺跡分布が空白となっている区間を見直して再踏査することにした。これまでの踏査はヘケテペケ川中流域を南北に貫くルートを広く検討してきたが、本研究では南側に焦点を絞ることとした。これは、とくにモスキート遺跡が形成期早期に対応すると見込まれることを踏まえ、形成期早期の中でもとくに古い神殿を多数擁する、南方の諸河谷との間を優先的に研究対象としたためである。

4. 研究成果

(1) 2011年、発掘の成果

①モスキート遺跡

Z1基壇の発掘により、少なくとも4回にわたって建築が大規模に拡張されてきたこと、またその内部の裏込め層から土器が一切発見されないことが明らかとなった。さらに放射性炭素年代測定法によって、アマカス複合遺跡に先立ち、形成期早期（紀元前1500年以前）にさかのぼる神殿建築であることが確実となった。周囲のマウンドとの関係の検討と、それによる神殿の全体像の解明は今後の課題とする。

②レチューサス遺跡

地形の観察から1辺約20mの正方形の半地下式広場の位置を特定し、その周辺を発掘したところ、広場の3辺を基壇建築が囲む「U字型基壇配置」という、形成期中期・後期の神殿に典型的なプランを持つことがわかった。また同じ河谷の他の遺跡との間で出土土器を比較したところ、神殿として機能したのは形成期後期前半（紀元前約800～550年）であるとの見通しを得た。ただし発掘された基壇群は総じて建築の更新回数が少ないため、おそらく形成期後期前半の全期間を通じて機能したわけではなく、その放棄は比較的早い時点であったと想定される。この点は炭化物サンプルの年代測定を継続し、今後あきらかにしていく。

(2) 2012年、広域踏査の成果

ヘケテペケ川中流域から南方の諸河谷に向かって想定されるルート上を訪れ、5地点にて神殿や岩絵などの形成期遺跡を発見し、南北方向ルートの実相を解明した。

まずヘケテペケ川中流域から、南を併走するチカマ川の中流域にかけての2地点で、小規模ながら形成期土器を伴うマウンド遺跡

を発見した。さらにチカマ川からより南方にかけての仮想ルート上で、神殿と考えられる形成期遺跡を2地点で発見し、またより後代の建築とされていた1遺跡が実際には形成期の神殿であるとの見通しを得た。とくにモスキート遺跡同様に、土器導入に先立つ形成期早期の神殿遺跡や、その直後に相当する形成期前期の神殿遺跡を発見し、それらが1本の線上に連なることを示したのは、「地域間ルートの結節点における神殿の成立」という仮説を検証する上で大きな進展であったと言える。

(3) 成果の総括・今後の展望

このように本研究は計画通りのデータ収集を達成し、また定住村落の成立と山間部を貫く地域間関係を関連づけることができた。これは、山岳部で展開したアンデス文明の特色を人類史に位置づける上で重要な成果である。

採集された遺物の分析は現在も継続中であり、村落機能の実態に関しては今後結論をまとめて包括的に報告することとしたい。

なお本研究を通じ、モスキート遺跡に含まれる神殿群の数と分布範囲がきわめて広いことが判明した。そのため流域最古の形成期早期の神殿といても、その中での共時的・通時的関係はいまだ明らかでない。今後はこの遺跡を重点的に調査していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

(1) Tsurumi, Eisei y Carlos Morales Castro (2012) Plataforma con petroglifo del Periodo Formativo en la Pampa de Mosquito, valle medio de Jequetepeque. *Arqueológicas* 29:19-35. (査読あり)

(2) Víctor F. Vásquez, Eisei Tsurumi, Thomas Pozorski, Shelia Pozorski y Teresa Rosales Tham (2012) Evidencias zooarqueológicas y escultóricas de pesca oceánica en la costa norte. *Revista Archaeobios* 6: 92-96. (査読なし)

http://www.arqueobios.org/es/revista-arqueobios/archivo/cat_view/6-archaeobios-2012.html?limit=10&limitstart=0&order=name&dir=ASC

(3) 鶴見英成 (2012) 「ペルー北部3河谷踏査概報」『古代アメリカ』15: 65-74. (査読あり)

(4) 鶴見英成 (2011) 「アンデス文明形成期

における生物資源利用」『共生の文化研究』5:189-191. (査読なし)

(5) Matsumoto, Yuichi and Eisei Tsurumi (2011) Archeological Investigations at Sajara-patac in the Upper Huallaga Basin, Peru. *Ñawpa Pacha, Journal of Andean Archaeology* 31(1) 55-100. (査読あり)

[学会発表] (計6件)

(1) Tsurumi, Eisei, The early ceramic from Tembladera and its chronological sequence. 78th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, Hawaii Convention Center, Honolulu, USA. (2013年04月04日)

(2) 鶴見英成 「アンデス文明形成期におけるヘケテペケ川流域の経済基盤」ワークショップ: 古代文明における経済基盤と祭祀—マヤとアンデスの比較—、東京大学総合研究博物館。(2013年1月26日)

(3) 鶴見英成 「アンデス縦断の視点からの形成期セトルメント試論」古代アメリカ学会第17回研究大会、国立民族学博物館。(2012年12月1日)

(4) Tsurumi, Eisei, Estudio de los asentamientos formativos y el paisaje cultural en Tembladera, el valle medio de Jequetepeque”. 54th International Congress of Americanists, University of Vienna, Austria. (2012年7月19日)

(5) Tsurumi, Eisei, Arte rupestre y centro ceremonial; un ensayo sobre el movimiento migratorio interregional durante el Formativo. Congreso Internacional “Arqueología y Arte Rupestre; 25 Años SIARB”, Museo Nacional de Etnografía y Folklore, La Paz, Bolivia. (2012年6月28日)

(6) 鶴見英成 「ヘケテペケ川中流域第5次発掘調査—テンブラデーラ対岸の神殿遺跡群—」古代アメリカ学会第16回研究大会、埼玉大学。(2011年12月3日)

[図書] (計1件)

(1) 鶴見英成 (2012) 「砂漠のワードローブ 古代アンデス織物の年代測定」『アルケオメトリア 考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』吉田邦夫編: 261-274.

[その他]

アウトリーチ活動 (計9件)

(1) 鶴見英成「古代アンデスを彷徨う ペルー考古学の現場から」文京生涯カレッジ、文京学院生涯学習センター。(2013年5月14・21・28日)

(2) 鶴見英成「アンデス山中に古代キャラバンの影を追う」東京大学情報学環福武ホールカフェイベントU-Talk、東京大学福武ホールUTCafe。(2012年8月11日)

(3) 鶴見英成「南米アンデスの古代文明 インカ帝国へと至る道」文京生涯カレッジ、文京学院生涯学習センター。(2012年5月8・15日)

(4) 鶴見英成「下を向いて歩こう：遺跡踏査の煩悶と愉悅」アンデス文明研究会特別講座、東京外国語大学本郷サテライト。(2011年7月16日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴見 英成 (TSURUMI EISEI)
東京大学・総合研究博物館・助教
研究者番号：00529068